

パ〜ブル

第40号

高村昌憲 個人誌



表紙：宿谷志郎 *Shiro*

目次

パープル 第40号 目次

高村昌憲・個人誌 <Takamura Masanori : Kojin-shi>

詩

庄内の桜	高村昌憲
四月の空	高村昌憲
沈黙の天使	中平 耀

翻訳詩

アラン『ガブリエル詩集（七）』	高村昌憲 訳
-----------------------	--------

評論

初期プロポ断想(二十三)	高村昌憲
--------------------	------

編集後記

誌名/笠谷陽一 表紙デザイン/宿谷志郎 カット絵/高村喜美子

庄内の桜

高 村 昌 憲

雪国の春は花嫁行列
一目でも見たいお堀端
蕾のままでも桜は待つ
致道館から孔子が消えた

春が来ても戻ってこない
都会へ消えた釣り人の群れ
三雪橋から月山が見えない
桜よ！ 思い出を見せてくれ

四月の空

高 村 昌 憲

足かけ三十八年間勤務してきたのに
やはり給料以上に勤めた理由が無い
役所みたいな職場だったから会長は国
役人は出版するのも許可がいるらしい

組織と違う考えを書いて発表するのも
一流企業の会長さんは認めないらしい
集団の思考を大海へ押し流した三月の雲
清流の岩魚のような四月の空が眩しい

沈黙の天使

中 平 耀

「沈黙の天使が飛んだ、
といふ言ひ方がロシア語にはある。
お喋りな座談がふと途切れ、
一瞬しんと静まりかへつたときに言ふ。
比喩としても実感としても實に秀逸な表現だ。
「沈黙の天使、が飛ぶと人は我に返り、
言葉のない淵にある自分に気づく。
そのときかの天使はありありと實在する。
目をつぶつてその静けさに身を委ねてみよ。

ことは座談にかぎらぬ。
わが生の途上にも折節かの天使が飛んだ。
けれど私は言葉の隙間を無駄な言葉で埋めようとした。
時にはかの天使の羽を拂ひのけさへした、
天使は悲しそうに面を伏せた。
ために私はしばしば氣まづい沈黙を重ねる羽目になった。
その状態がそのまま続けば、
遂には私自身が狂ひだしかねなかつたほどの。

わが生のぶざまな在りやうは
ひとへに私の無知と不遜のせいだつた。
かの天使の背負ふ沈黙はわれらの思慮の外にある。
それは自然を充たし支へてゐる静寂の中心から、
世界の黙した中心からやつてくる。
それなくしてはわれらの存在が崩れてしまふかも知れぬ。
そのことを気づかせてくれるために
かの天使は折にふれてわれらの上を飛ぶのだ。
われらを取り巻く饒舌と騒音のさなかに。



人生

乾燥した海藻と焼かれた荒野の香り
動き易い丁度良い洋服 あなたの美しい体
金色の背光の中に永遠のあなたの両眼
燃えるような乱闘の中で破れたりノンの織物

あなたの奇妙な手による翼への愛撫と
燃える航跡は見知らぬ大地の果てと
数々の財宝を探し回りながら
海水の力をあなたの処まで齎していた

薔薇の花束とエリカと月桂樹の葉
大きくなった小低木としなやかな蔓植物は
柏の樹を巻くキツタよりも緊密に素早く結びつく

それと同時に無関心の世界を巻くキツタよりも緊密で素早く
次の散文に向ってでこぼこに巻きつけたその人は
待つことを知った人であり 辛辣な勝利者でもあった

（彼女の詩集のためにL・Gへ 一九二九年十月）

孤独

私たちが一緒に煙草を吸った場所に戻る時
私は期待して心が震えるのを感じている
薄い網が忍び込んで私の両眼に及び
それをあなたの波の髪型にしたいと思う
涙を流す湖上でときめく私の瞼は
魅惑的なあなたの姿をした翼のある輪郭と
何か毅然とした襟の動きを探している
私はあなたの真似をして少し首を傾げる
あなたは突然に安心して多分 私に注意深く手を任せた
もしも清純な女性で 優しく触れたなら
私は温かさを手に入れたと信じて甘く魅惑される
暖かい監獄の中で何物かが動いた
ほんの少し！ 私の掌にあなたが帰って来たのだろうか？
香水で重荷が軽くなる あるいは薄荷の香りだろうか？
吐息が私の周りに吹かれ 心を暖める
溜息という希望と欲望という翼は
眼に見えない飛行の中で突然に私に触れる
私の肩の上に小鳥の重さを感じさせてくれた

(彼女の詩集のためにG・Lへ 一九二九年十月)

沈黙

何も言うな 影は優しく 時間が落着かせる
憔悴した秋は震える霧の服を着る
赤褐色の葉から一条の微光が滑り込む
そんな風にして多分 幸福の思い出とか
歓喜に溢れて流す涙の予感が

人生に胸をときめかせる金色の縁飾りに輝く
あなたが知っている世界は睫毛を照らし
そして あなたの存在はそれらの緻密な紐に巻かれる
恐らく 思考したあなたの青春は大空そのもの
黒い岬と虹色のテーブルクロス
燃えるような岩 密生した芝 金色の棒
慎みのないそれらの茨が何度も突き刺して攻撃する
あなたの一番の秘密は熱い影の中で
エメラルドの平原に佇む緋の衣の神を探すこと
あなたがこれらの永遠の儀式を心で意識する時
ゆっくりせよ 何も言うな 何故なら言葉は残酷だから
それらの言葉は あなたの眩きに包まれて
海藻の動きと糸状の波を裂く
それらの言葉は 拒絶の線を引きながら
あなたが存在を望むものと望んでいたものを葬る
しかし あゝ無口な女よ あなたが存在する音を聞け
あなたは独りしかおらず 自分に正直な人で
その性格は貴重で味わい深く そして何時も
血液の眩きを変えたいのに拒絶している
あなたが何時も秘密の法則に従って書き直すのは
心を奪われた人のイメージと
あなたのやり方に従った精神の痕跡
それは一層あなたに似てきて あなた以上になる
柔らかなベッドの中での乳白色の大河のように
波形模様の曲線の中にあなたの体は
お気に入りのやり方に従って巻かれている

(彼女の詩集のためにG・Lへ 一九二九年十月十八日)

大空

低く垂れ込めた雲が鉛色の斜面を転がる時
貪欲な私たちの眼前で 大空が純真さと
虚しさ 心を癒す青色によって涙を流す時
全てのものが暗く 疑わしく 脅迫的で 重苦しく
垂れ込めた靄の底であなたが考えたのは
時間と行く道を待ちながら 純粹でもあった
過ぎた私たちの時間の青空が見付かるだろうか？
あなたが何時も理解するのはより良い明日が
多分 暗い大きな雲に開いた一つの穴のように
水蒸気だけで洗われた青空を私たちに見せていて
それらの涙や苦しみの中で何よりも純粹だろうか？

時々 春が穀物の種子を刺激する時
私たちが暗い大気の下で待ち伏せるのは
陽気な明日の太陽と暗闇が全ての父親
そして霰が太鼓の響く音を打ち
純粹な愛をもった大空から涙よりも輝いている
一粒の金剛石の閃光を急いで隠すのだ

秋は不安だらけの心にとって最も残酷だ
秋は閉塞し 私たちの心に悲しみを眠らせる
私たちの視線には不透明の白い世界が広がり
私たちが躊躇しながら出した手を戻させる
心の奥底では懷疑や陰鬱な期待に返させる
おゝ嘘つきよ！ おゝ眠る者よ！ 心を信じて
未来の曙をとっくの昔に拒絶しながら
虚しく薔薇に包まれて大空に口づけする人よ！
私たちの希望は全てこの陰鬱な視線に凍りつく

山の彼方のあの世は美しく真冬に輝き
僅かに開いた大空には純粹さと冷静さの
平然とした星たちで飾った黒いビロードしか見えず
水兵は眼に見えない翼で航海し

純粹な光線の冷静な閃光を信頼する
歳を取った黒い大洋！ 眼に見えない水平線！

このように灰色の大空に支配された私の思考
私は凍ったような靄が晴れるのを見た
おゝ青空よ あなたは躊躇した行為と
はっきりとしない動きを永遠に拒否しているように見えた
蒼白い光に明るく照らされているのは秋

あなたの薔薇色の顔はオパールの色彩に染まった
危険で 余りに静かで単調な月の光を
半分だけ残して反射して写していた
あなたは自分だけの愛撫に物憂げで
不毛で陰鬱な英知の大理石の私に似ていた

あなたの怪しげな夢の中で 稲妻のように
靄を突き刺した言葉 あるいは鋭く通した視線は何なのか？
私には分らない しかしそれは突然の華麗なる動き
喜びのように自由で 草のように若々しい
あなたは私の上で蜂蜜色の額を右に回転させた
そして金色の睫毛の下に 大空からのあなたの二つの水滴は
光り輝き 証拠を探していたこの非常識な人間に
貞淑で無垢な魂を全て放擲していた

(一九二九年十月)



高村喜美子「思い出の花束」（15F）

初期プロポ断想（二十三）

高村 昌憲

1 中庸の徳

もしもアランが勲章を授けられる年齢になって、皆がお祝いに来てくれたならば、何故なら何でも起こるのですから、アランは次のように言うだろう、と書いているのが一九〇八年一月十四日のプロポですから、賞についてアランは如何に考えていたのか、少し長いですが引用してみます。

「名誉とは大変に重い言葉で、大変に偉大なことです。でも私は公共のために血を流してきませんでした。ですからあなた方は、私が本当に弱くて欠点だらけであるのに、純粋に内なる英雄主義や稀有で貴重な美德を見たがっていると私は思います。私にも良心の呵責があることを敢えて言います。私の人生とはそういうものであり、そのことをあなた方が知らないことを私は知っていますし、私の人生は完璧ではありませんでした。一度ならず私は感情の勢いから花咲く小道へ足を踏み入れ、暗黒の絶壁の淵まで行きましたが、そこへ落ちませんでした。本当です。そして、私が保持していたこの中庸の徳の計算書を作るのは誰でしょうか？ 私の美德に混淆していた恐怖の量や怠惰の量を切り離して量るのは、どんな化学者でしょうか？

私の記録に基づいて決定するのは高貴な審判者であるとあなた方は言います。しかし、それは信頼出来ません。もしも私がその重さを判定したいと思ったなら、私は打ち明け話を話してよくあるような罪の懺悔をしなければならいでしょう。しかし、大変に高潔な人間によって与えられた罪の許しは、私にとって有難いものにならないのを告白します。不幸なことに、あなた方が言う審判者たちは、大変に高潔とは見做せません。彼らを傷付けないで言えることは、彼らもあなた方や私と同じ様な人間であり、喜ばない記憶なら幾らでも自分の人生にあるということです。もし良心的指導者や名誉ある審判者を探したとしても、私は告白しますが、彼らは私が考えていたような人々ではありません。

私はあきれ程物事を大袈裟にしています、問題としている名誉とは大変に物静かで善良で小さな美德であり、何時も定刻通り決まり切ってやって来ることはなく、国家業務に疲れることも傷付けられることもない役人たちを毎日受勲しているとあなた方は言います。よろしい。でも、そうは言っても、レジョン・ド・ヌール賞の赤い略章を持っていないフランス人が、何故そんなに沢山いるのだらうと私は自問します。それというのも中庸の徳を持っている人々は、取分け大きな悪徳とは無縁であり、私はそんな人を自分の周りの至る所で見ているからです。中庸の徳は舗装された道に生えているようなもので、郵便配達人や門衛や市内電車の運転手は、私にとって

大変に大切な人々です。実際に勲章もない知り合いの多くの人々にこの中庸の徳がないと思わせて置くのは我慢がなりません、そしてその中庸の徳からあなた方は私のボタンホールにそのバッジを付けたがっているのです。そこには嘘があります、私は決して共犯者になりません。」

アランが何故、賞や勲章を固辞し続けたのか、アラン自身の内面が吐露されているこのプロポは、ある意味で人生における根本的な見方や信念や思想というものが含まれているように感じます。何が一番大切か、賞や勲章を固辞し続けることによってはっきりと見えてくるのです。賞や勲章は、家族や郵便配達人や門衛や市内電車の運転手などのように、自分と最も関係した人々とは無縁の代物であり、それらは世間という観念的で自分とは殆ど関係の無い人々への名誉に溢れております。それは毎日充実していて本心から楽しいと思う日々の生活から遊離していき、延いては自分自身の虚栄心や功名心の増長に一役買うものに変身します。快樂や怠惰を友にします。従ってそれらは、自分自身ばかりでなく自分と関係の深い人々も不幸に陥れる可能性も生まれます。何が大切かが分からなくなってくるのです。アランにとって一番大切なものは毎日書くことでしたから、自然と賞や勲章を固辞し続ける生活になっていきました。そのことを考えて、このプロポの続きを読んでみて下さい。

「その時、賢者は私に言うのでしょうか。「何故そんなに話をするのですか？ 習慣が大切です。ですから習慣を理解しなさい。ミサへ行く人々のように振舞いなさい。あなたは、パンと葡萄酒からキリストの肉と血に変わったという実体変化の緻密さを彼らが考えていると思いますか？」。その通りです。しかし、正確に言うなら、私はミサへ行きません。」

この様にしてこのプロポは終わっています。緻密に考えないで習慣に従って、世間的に本人の名誉となる勲章を貰えば良いと考える人が多いと思いますが、アランは固辞し続けました。授賞式へ行く時間も無駄に出来ない位に毎日が充実していて、もったいないと思ったのです。毎日書き続けたアランの人生がそれを証明しています。第一次世界大戦へ参戦した時も、戦闘中でない限り書き続けました。モーツァルトが人と話をしていても頭の中に音楽が鳴って作曲していたように、戦場にいたアランの頭の中も言葉が聞こえていたに違いありません。ミサへ行かないアランですが、ミサへ行かないことが大切なのではなく、ミサへ行けない位にミサよりも大切なものがあったのです。そしてアランは、ミサや宗教や習慣を馬鹿にすることも認めませんでした。そのことを次のように書いています。

「十字架を想像するや否や馬鹿にすること、十字架を持っていないと分かるや否や詰まらない言

い訳を付くことは余りに滑稽です。私は人間の心理を分析するこの若い商人を気の毒に思います。レジョン・ド・ヌール勲章は宗教的な制度です。祈りや儀式を果たすことになります。それを拒否することも出来ますし、その理由を言わないことも出来ます。しかし、それを馬鹿にしながら祈ること、そして聖人という聖人を馬鹿にした仕草をすることも、弱い人間です。」

弱い人間は虚勢を張ります。賞や勲章を固辞したことを強調しようとします。しかし、強い人間、人が何を言っても気にしない人間、毎日が充実している人間は、固辞した理由を言う必要は無いとアランは言います。行動が全てであると思う時があっても良い筈です。

2 変わらないもの

人には喜びも苦しみもあります。何時もそれらの重さが違いますから、量りたいと思います。それが自然であり、出来れば喜びは重く、苦しみは軽い方を望みます。ところがこの世には変わらないものがあります。アランは一九〇八年一月十六日のプロポを次のように書き始めます。

「チェスのゲームは変化しませんでした。国民の一般的な家も変化しませんでした。そのことは全てのものが進歩と重なる訳ではないことをよく理解させています。私たちは電気で動く列車を運転させていますし、利己主義にも愛他主義にも磨きをかけています。しかしながら、モーやどんな町にもある城壁で出来た通りに門が閉じられた家がありますが、この家にはポリネシアの人間と左程違わない未開で残酷な人々がおります。」

彼らは現代の私たちと道徳論的にも程遠いと人々は言うのですが、そんなことはなく、恐らく彼らは現代の私たちにより近い人間である、とアランは書いています。其処で生活しているのは、動物のように仕事をしている奴隷たちです。そこでは着飾った女たちが金のためにあなたにサービスし、他の所では骨付きあばら肉をサービスすることもあります。奴隷や奴隷商人たちは、地下の囚人のように、何時も自由や愛や家族や名誉のことを考えており、まるで地獄に落ちた人々が天国のことを考えているようなものである、と純真な心を持ったあなたは思います。でも、全然違います。彼らも人間の生活に変わりありません。彼らには調子が良い時もあれば、笑うことも泣くことも喧嘩をすることも仲良くなることもあります。力尽くで管理する奴隷の主

人と、口で説得して管理する主人がおります。彼らの裡には狂気と英知があります。道理にかなった格言があります。名誉の規範があります。侮辱もあります。無礼もあります。崇高な情熱と下劣な情熱があります。一方ではけちなために軽蔑され、他方では嫉み深くて嘘つきとして知られています。別の人は大変に優しく、心からの本当の涙を流して、愛に死ぬこともあるとアランは言います。

しかし、他方では日々の仕事が情熱を眠らせています。暇な時はお喋りをして過ごします。人生は修道院の中にいるようなものです。院長は恐れられますが、心の中で少しは愛されていて、クリームケーキの周りでガラス器を上げながら祝祭を行います。その時人々は一瞬にして忘れ、仕事とは秩序あるもので、情熱は無秩序のもので、話という話が似たようなものであっても、我を忘れていきます。

アランは、主人と奴隷の関係に無い外国人の口を借りて、次のように書いています。

「そのことを聞いた外国人は、快樂を売る哀れな商売人たちに、恐らく叫んで言うでしょう。「ですからあなたがやっている仕事のことを考えなさい。あなたを雇って、あなたを道具や食料のように売り飛ばす野獣のような人のことを考えなさい。そういうことを全て判断しなさい。そういうことを全て断ち切りなさい。そうしてから次に、ガラス器を高く上げなさい」。その外国人は笑わせます。習慣に対して理性を持ち出すために、外国人は何時も少しばかり滑稽です。不意を食らって驚いた人間を私たちは笑いますし、私たちの礼儀正しさ、正義、表向きの話、美德そして喜びと苦しみを、〈理性〉という秤で量りたいと思います。」

量ることは思考することでもあります。何故なら大切なものの重さを量り、大切にないものの重さと比べて、判断する材料に出来るからです。つまり人間が思考し判断するには秤という道具が必要になってきます。哀れな奴隷は、主人との関係しか見ようとしません。力尽くで管理する主人と、口で説得させる英知のある主人と比べることもしません。何故なら、彼には秤が無いから比べられないのです。外国人のように自らを客観的に見れば、大切なものが見える筈です。それは何時でも変わらないものです。礼儀正しさ、正義、表向きの話、美德そして喜びと苦しみを変わらないものです。苦しみよりも喜びの方が何時も重いのです。〈理性〉という秤で量ってみれば分かります。

しかし、哀れな商売人たちは量ろうとしません。奴隷と主人の関係の中で見るしかなく、それが全てになっているからです。奴隷の悲劇は、一人の主人との関係の中でしか生きられないことにあり、決して多くのものの重さを量る機会が与えられていないばかりに比べることが出来ず、延いては自分にとって一番大切なものが分からないことにあります。悲しいかな、そのような状況は現代の我が国にも見受けられます。

例えば、企業の中でよく見受けられます。私の経験から言うなら、大企業よりも中小企業によ

く見受けられます。社長の息子などが、社員やアルバイトに罵声を浴びせたり苛めたりしています。住宅ローンを毎月払い続けている社員は正に現代の奴隷であり、会社を辞めることも出来ず、社長の息子の言いなりです。苦しみよりも喜びの方が重いと自ら判断出来ずに、理性の鏡が曇り始めます。何が大切かが分からなくなります。

第一次世界大戦へ志願して参戦したアランは「一緒に前進し、一緒に考えないこと」を勧めています。参戦中の一九一六年一月二二日に書いています。つまり行為は、組織の中ですから〈一緒に〉行動しなければなりません、思考は外部から強要されてはなりません。考えることは、あくまで個人の頭で納得する英知が必要であり大切です。日本の企業は、社員の考え方で強要し、同じ言葉を強制的に言わせて売り上げを伸ばそうとします。私は個人的感想を言えば、朝礼で社訓を言わせる企業がどうしても好きになれません。売り上げを伸ばすためには、人間の精神まで変えようとしています。売り上げを伸ばすには、精神を変えなくても幾らでも良い方法がある筈です。同じ様なことをモンテーニュも言っており、「群衆に肉体を預けること、しかし精神は助けること」の言葉をアランは紹介しています。当時のフランス軍にもその位の自由は必要で大切だったのであり、決して精神の奴隷を望んではいませんでした。従って当初は兵士が書いたものを検閲していたようでしたが、直ぐに廃止したとのこと。それに比べて旧日本軍は元より、占領軍（GHQ）による日本人の私信まで開封した検閲の目的が、日本社会の民主化にあったとしても、正にそれは精神の奴隷化に繋がる行為であり、民主化と矛盾する行為であることを見逃してはならないと思います。検閲は表現を歪曲させて〈一緒に考える〉ためのものであって如何に民主的でない行為か、何時の時代でも変わらないものであり、現代においても社会の隅々まで点検しなければならないと私は考えます。もしかすると検閲と同じ様な行為が、今でも我が国の組織においては至る処で行われているのではないのでしょうか。（次章へ続く）

編集後記

◆高村昌憲個人誌として一九九六年六月に創刊した「パープル」も、今号で第四〇号となった。諸般の事情により今号からは紙媒体のものから電子書籍として発刊することとなった。電子書籍はグーテンベルクの印刷術以来の革命的出来事と言われているが、その未来について私には未だ分からない。紙媒体には紙媒体の良さがある。例えば検索の手軽さなど検索機能の面では優れている部分もあるから、羊皮紙から紙へ全面的に移行したように紙から電子書籍へ全面的に移行するのか、私には分からない。只、一つ言えることは、電子書籍は手軽に公表出来て紙媒体のものより伝達性に優れているから、可能性としては従前よりも遙かに多くの読者を持つことが出来る点がある。そういう意味では電子書籍は民主主義社会において特定の情報のみに偏向しないで済むから、重要なツール（道具）に成るような予感がする。組織が教義や方針などをプロパガンダ（宣伝）するよりも、個人が思考するために必須のツールに成るだろうと思う。勿論、〈言葉〉を味わうための詩としての側面、あるいは紙媒体に印刷された文字から〈思考〉する行為のための側面は、まだまだ電子媒体に慣れるまでは時間がかかるだろうと思う。しかし、私としては思想と共に言葉の先端を独りで行かなければならないのが詩人であるなら、電子書籍は在るべき詩への実験室になるだろうと考えている。読者諸氏のご叱正を請いたいと思う。

◆本誌への執筆者である中平耀氏から、「電子書籍はプリンターへ印刷して読めるのか？」という質問があったので、お答えしたい。結論から先に言うと、勿論、印刷も可能であり、ホームページの画面を印刷する要領で行って下さい。きれいに印刷したい時は、PDF形式又はePub形式に対応したソフトを自分のPCへダウンロードしてから、電子書籍の画面からダウンロードして、印刷して下さい。

◆パープル第四一号は二〇一二年十一月二十一日発表予定である。

高村昌憲個人誌 パ〜プル (第40号)

(2012年 5月21日登録)

<http://p.booklog.jp/book/50015>

編集・発行者：高村昌憲

編集・発行者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/50015>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/50015>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.